いました。

続いて絵画鑑賞です。美術館はレストランと渡り廊下で結ばれていました。当日の企画は『黙示録―絹川幸二展』で、世田谷在住の洋画家でイタリアで壁画を勉強され日本の古墳の壁画の修復作業にも携われた絹谷画伯の個展でした。画伯は小磯良平氏に師事された方だそうで、小磯画伯と聞くとすぐあの山高帽をかぶった金子直吉翁の肖像画が思い出されましたが、個展の作品は小磯風とは全く違って、数枚のデッサンを除くと、写実より観念に重きを置いた思想性のある大作揃いでした。作品の多くは画面からはみ出さんばかりの大胆な構図に赤、黄色、黒などの原色が豊かに加えられ、真に迫力にあふれたものでした。一時間半ほどで展覧会を観終えて、再びレストラン入り口に集合し、お土産にクッキーを頂戴して解散となりました。天候に恵まれ、素晴らしい環境の中、お陰さまで大変楽しく過ごせていただきました。

次は秋の例会となりますが、また皆様とお会いできるのを楽しみに致しております。（Y・K記）

東京支部 秋の例会

十月三十日（木）東京支部秋の例会、雲一つない秋晴れ、九月下旬から十月上旬並みのポカポカ陽気に恵まれ、昨年新しく高層ビルに生まれ変わった丸ビル三十六階の「福臨門魚翅海鮮酒家」丸ビル店で開催されました。

丸の内ビジネス街の中心として親しまれて来た旧丸ビルも三十六階建ての高層ビルに変容し、国際的なビジネスのオフィスビル、そしてショッピングやグルメ、カルチャー、エンターテイメントが楽しめる新しい丸の内スタイルになりました。直通エレベーターで三十六階の同店の程よい広さの明るい個室に案内される。部屋からは正面に坂下門、皇居のお濠と、ところどころ僅かに色づいている森が眼前に展がり、東御苑、皇居外苑、宮内庁の屋根等を望み、その向うには新宿の高層ビル街、更に遠くには丹沢の山並みがうっすらと見える。この皇居の静寂の森を眼前にして戦争や報復テロや紛争の続く世界に早く平和が訪れないものだろうかと想う。

正午前に参加十五名（柳田辰巳さん、横田周作さんの奥様が東京の例会に初めて参加された）全員がお揃いになり二つの丸テーブルに分かれて着席、荒木義弘幹事の進行で先ず荒木正雄支部長のご挨拶の後神戸から御参加の柳田辰巳さんの自己紹介があり、武岡さんのご発声で乾杯、懇親の宴となりました。評判の広東料理の数々が次々と運ばれ、お酒を酌み交わし、料理を堪能しながら和やかな雰囲気で歓談、もろもろの話題で賑やかな一刻となりました。話も弾むうちに予定の二時となり荒木幹事よりの閉会の言葉でお開きとなり、福臨門の饅頭をお土産にいただき再会を約して解散となりました。

この日の宴席は二つの丸テーブルに分散着席だったのでそれぞれのテーブル毎での歓談となりました。全員同席の方がよかったかなと思いました。

企画から店との折渉等すべて荒木幹事にお世話になりました。楽しい一日でした。

平成十五年度 辰巳会
東京支部 秋の例会参加者

平成十五年十月三十日㈭
於・丸ビル 福臨門酒家
（順不同・敬称略）

荒木正雄　柳田辰巳
安東浄　西川明子
木村隆昭　森美子
武岡輝彦　横田周作
長橋忠男　横田よしこ
池田宗吉　移川京子
安武史郎　荒木義弘
住田正二

参加者十五名

辰巳会 会員だより

母、金子貞子を想う

東條佳子

自然を愛し、野に咲く草花を慈しみ「人には裏切られることもあるが、草花は手を掛ければ掛けるだけのことを返してくれる」と根気良く手入れをし、又、とても勉強家で、いつ草花の名前を聞いても、即、名前が返ってくるのには、いつも我母は「凄い！」と感心しておりました。

こんなに早く別れが来るなんて思っても見なかったので、昨年九月に京都の山草会の仲間の方と一緒に、信州の野麦峠へ行くのを誘われたのですが、九月末で定年退職する予定でしたので、十月からは母とのんびり出来ると思い、同行せず……旅行から帰ってきて少し、しんどいと言って肺炎で入院、本人は、まだまだ元気で旅行を楽しむつもりで、病床の中で看護師さんに「退院の時持って帰る」と言って代筆してもらった「笹の葉に　命もらいし　ありがたき」の句を残し、……集中治療室に入ったまま四十日程の入院で、何も話さないままに、あっというまに天国へ召され、未だに信じられず、電話をすると元気な声が返って来そうな毎日を過ごしております。母らしく集中治療室での入院だったので、周りの人の事を思ってか、誰にも看病疲れをさせず、何も話してくれないままのあっけない最後でした。

又母は、とても楽天的な人で、私の主人亡き後も、私がくよくよ悩んでいると「人生成るようにしか成らないのだから」「ケ・セラ・セラ」よ。と…私をいつも励ましてくれ、随分助けられて参りましたのでこれから……と思ってましたのに、未だに「何で…」と悔しい気持ちで一杯です。

体には人一倍気をつけており、糖尿病を患ってましたが「体の中に子供を抱えているの」と言って意思が強く、自己管理をしっかりして、前向きに人生を楽しんでましたのに……今思えば院内感染もあったのでは……とよぎる事も……と姉弟で悔やんでおります。

何事も一生懸命で、趣味も多く常にマイペースで、器用で根気が良く又、想像力が抜群で独自のアイディアで図案を考え、押し花等は先生より上手で、日本画・俳画・俳句・デコバージュ・太極拳・お菓子作り等、大谷の叔母（母の妹）と「今の世に全盛の人だったらきっとマスコミに引っ張りだこね」と「こんなに早く天国に行くなんて、本人は考えていなかったでしょうね」と母亡き後、いつも話してます。

誰に対しても平等で、いつもニコニコと明るい母は、私たち姉弟の誇りです。一歳三ケ月で病死した弟（三男）の事をいつも案じてましたので、私たち姉弟は「天国でお父さんと渉（ワタル）ちゃんが待っているので幸せにネ」と言って天国へ送りました。

後年母の付き添いで「辰巳会」に参加させて頂き、何も知らなかった母の実家の「鈴木の事」や辰巳会のみなさんの功績等伺うことが出来、又、いろんな方にお目にかかることが出来、視野を広げさせて頂き、人は、みんなに支えられて生きていることを身にしみて感じました。

「サーちゃん・サーちゃん」とみんなに愛されていた母、これからも天国からニコニコと、みんなの幸せを見守って頂きたいと思います。

お母さん「愛をありがとう！」天国でも、し・あ・わ・せ・に・ね。